

和光会会報No. 43

～菱電サービス（菱サ）～三菱電機ビルテクノサービス（MELTEC）本社OB会～

◆ 日本百名山完登 ……(2015-08)一中村弘道さんから投稿頂きました～

光陰矢の如し！和光会には平成15年6月発足時より入会し早いもので12年が過ぎました。遡ること自由人となって暫く後、『和光会会報 No18 (H21-4)』に趣味のことで投稿しました。

そこでウォーキング活動やシニアとして山岳登山の願望などに触れたかと思えます。お陰様でその後も“山歩き”は長続きして気付けば日本百名山の挑戦へとハードルを上げていました。そして平成25年10月、古希までに達成！と拘った『日本百名山完登』を果たすことが出来ました。

この段、誠に僭越ですが体験の一端をご報告する機会を頂きましたので一読頂けたら幸いです。

私は平成18年退職後に油彩画を始め、アウトドア活動として地元ウォーキング協会に入会しました。例会では情報交換が有益でしたが、ある時山談議をした折にシニアに



Sketch H21-7 鳥海山

相応しい山岳ツアー（町田アルペン）の存在を知りました。丁度北ア・焼岳（2,455m）の企画があり試しに参加したところ、マイクロバスによる登山口と下山口の送迎が便利であり、何より同世代（特に女性が多い！）でのゆっくり登山は長いブランクにも拘らず私に安心と自信を取戻させてくれました。

若い頃はワングル活動（名古屋・城東勤務）で立山、槍ヶ岳、北岳など山の魅力を体験していたこともあり、これが機に登山意欲が蘇りツアーへの参加を始めました。メンバーからは『深田久弥・日本百名山』のリクエストが多かったので、九州や北海道の山行まで関心をもって参加する内に百名山の実績（平成21年まで21座）も次第に増えました。百名山に挑み楽しむ喜びも出てきた頃、私の本気度？を窺い知ったウォーキング仲間の先輩・八幡三郎氏が『週刊日本百名山（朝日新聞社）』の全巻（50冊）をプレゼントしてくれました。この書籍は一座毎の解説など山岳の探求に多いに役立ち、リアルな鳥瞰図は目を通す度に山に魅了させられました。

山行は平成21年まではツアーに依存しましたが、その後車で一人旅をしているシニアに出会い、登山に同行して駐車場の確保・自炊・車中泊・コンパスの使い方など、安全な単独行のK/Hを教わり自主的に行動できるようになりました。ツアーに頼らずに行ける所は車（高速道の割引活用）での単独行、夜行バスでの移動と駅レンタカーの利用、



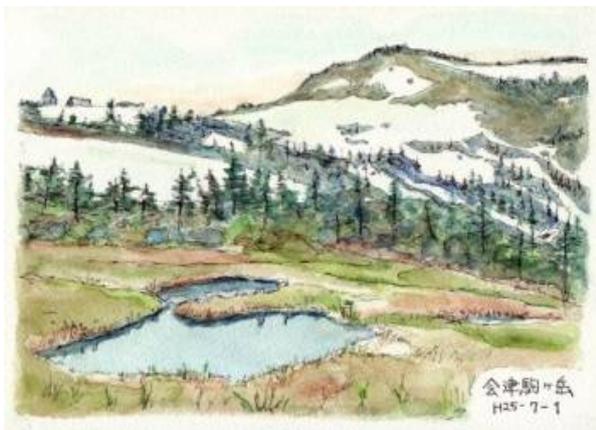
H23-8 南ア・千丈ヶ岳（松本氏と）



H24-8 日高最高峰・幌尻岳



Sketch H24-9 剣岳



Sketch H25-7 会津駒ヶ岳

て50年、山を楽しむ若者&シニアが多い中で“百名山に挑む”静かなブームは健在の様です。OB 諸兄に山に興味の方はおられるでしょうか。つたない報告がチャレンジ?のきっかけとなれば有難いです。

終わりに近況として、昨夏は私にとって宿願の“四国霊場八十八ヶ所順拝と高野山参詣”を果たしました。今年は今月1～2回の山歩きを再開しており、百名山のリピート(5月大菩薩嶺、7月立山)もはじめました。これからも自分の体力と相談しながら好きな山歩きとスケッチが続くことを願っています。



H25-10-18 百座目・平ヶ岳 (山友と)

【百名山経歴】 S39～54・・・11 座 /退職後 H18～21・・・10 座 /H22～25・・・79 座
* 内訳) ツアー・・・39 座 /会社・友人・・・31 座 /単独行・・・30 座

遠地ツアーも復路はツアーを離れて単独行を加えるなど、費用や効率も考えて一座～連座の山行計画を綿密に立てました。今時パソコンから必要情報は何でも収集できました。百名山山行データ、山小屋 HP、登山者山行録・ヤマレコ、道路ナビ・道路情報、立寄り温泉、山の天気予報(最優先)などで、これらの情報を集めながら計画を練る楽しさは格別でした。平成 23 年には通算 39 座の実績を自信にして百名山完登を一大決意し、期限は古希を迎えるまでとしました。これより年間 20 座を目安に邁進した結果、平成 25 年 10 月越後・平ヶ岳を最後に完登を果たしました。私は百座の夫々に山河風景を楽しみ、苦しみながら極めた頂に喜びと充実感を味わいました。

そして私にとってかけがえのない存在・・・登山復活から完登に導いて頂いた方々、苦楽を共にした山仲間、見守ってくれた友人や家人、すべての方へ感謝の念を忘れません。山への関心事は色々ですが、私は絵が好きなので高山に立ち入ってこそ得られるモチーフを見つけ一座一葉のスケッチを続けてきました。この程の第 13 回総会(H27-6)に12年ぶり!で参加しましたが、《展示コーナー》には油絵と共に日本百名山スケッチ集(水彩画)も披露させて頂きました。

この程山に親しみ・感謝する“山の日”が制定され嬉しいことです。深田久弥『日本百名山』が出版され

◆ 佐渡の島で能を観る

……(2015-08)ー山本石弘さんから投稿頂きましたー

今年(2015年)の6月、佐渡へ渡り、3週間ほど滞在し、能(楽)というものを観てきました。その時の感想などについて少しく書いてみたいと思います。

佐渡を旅するのは、今回が二度目です。島への旅は、フェリーを利用しなければならず、車の旅ではどうしても先送りしがちです。佐渡もそのような島の一つですが、9年前はTV局の取材を受けて、先方の希望に沿った形の旅でしたので、取材を終えた後、3~4日島内の主な観光名所などを見て回っただけでした。その際に一つ気になることがありました。幾つかの寺社を訪ねたのですが、村の小さな神社に立派な能舞台が設えられているのを不思議に思ったのです。能舞台となれば、格式の高い神社に備わっているのが普通だと思うのですが、佐渡の一宮の度津(わたつ)神社に能舞台はなく、もっと小さな村社レベルの神社に多いのです。



佐渡の神社の能舞台。左は羽茂にある草刈神社能舞台。右は真野地区に近い大膳神社の能舞台。

なぜ佐渡に能が盛んだったのか、当初は猿楽能の大成者の世阿弥が流された影響かと思ったりしましたが、そうではなく江戸時代の初期、金山開発に功のあった大久保長安という人の力が与って大きいとのことでした。この人は元猿楽師出身でしたが、鉱山開発の才に長けていた人で、当時多くの鉱山開発に関わっており、世界遺産の石見銀山もこの人の尽力が大きかったと聞いています。従って佐渡で能が盛んになったのは、江戸時代になってからということになるわけです。

私は能によらず、とんと芸能には縁のない人間で、能も狂言もまともにその気になって見たことがなく、知人に連れられて一、二度解らぬままに見ただけという経験しかありませんでした。そんな私が能に関心を持ったのは、初めて訪れた佐渡で、立派な能舞台を幾つか見て、「……、ああ、ここで実際に上演されている能を見てみたいものだ」と思ったのが動機でした。その時に聞いた話では、佐渡の能は、田植の済んだ6月に一番多く上演されるということでした。それは昔から田植えが終わって、村々の神社では、豊作の願いを込めて能が奉納されるからということなのです。それで、今度佐渡へ行くのは6月にしようと決めていたのです。

それ以降なかなか訪れる機会がなく、とうとう9年も経ってしまったのですが、今年ようやく長年の思いが実現することになりました。行く前に今年の6月の能の上演予定を調べたところ、6回あり、その内同日に別々の場所で行われるものが1回あるため、頑張って見ても5回しか見られないことが判りました。5回の内4回は薪能で、もう一回はろうそく能ということでした。どんな古典芸能音痴でも短期間に5回も能の上演を見れば、何か感ずることができるに違いないと思った次第です。

6月の1日に家を出発し、奥会津などを巡りながら、新潟港から佐渡に渡ったのは、5日でした。能の上演は、翌6日が最初で、7日、12日、15日、20日と予定されています。この内20日はお寺さんの本堂で上演されるろうそく能で、それ以外はすべて島の各所にある神社での薪能です。能舞台は見ても、そこでどんな形で上演されるのかは、全く無知なのです。

多少は予備知識も必要だろうと、事前に解説書などを読み舞台の仕様など凡その名前は覚えましたが、それがどのように使われるかは実際に見てみないと判らないことです。解説書の内容といえば、演目すなわちストーリーの解説が多いのですが、それはあまり力を入れて読まないことにしました。本番を観ることを通して学ぶのが一番だと考えたからです。

ということで、最初の能の鑑賞は6日、両津港に近い椎崎諏訪神社の能舞台での薪能でした。駐車場所を確保するため、開演の5時間も前に神社脇に旅車を止め、19時の開演までは昼寝をするなどして過ごしました。このような時、旅車は至って便利で、TVを見るのも横になるのも自在です。

18時半に受付が始まりましたが、その前に既に席は確保しており、舞台正面の一番見やすい所に陣取りました。何しろ野外の観覧席で、指定などなく、ブルーシートの上にゴザが敷いてあるだけの簡素なものなのです。佐渡の能の殆どは無料なのですが、偶々今日は運営協力金として一人千円也を求められました。東京近郊などで開催される高額な料金から比べれば、真にリーズナブルな額だと思いました。

開演の19時が近づき、さあ、どんな具合に始まるのだろうかと思いつつ興味津々でした。何しろこんなに間近に舞台を見上げるのは初めてのことなのです。10分ほど前になると、火入れの儀というのが始まりました。神主のお祓いを受け、松明を持った巫女さんが、用意されている篝火の籠に向かい、篝火担当の人にその松明を渡し、順次二つの籠に篝火が灯りました。うす暗くなりかけていた空が、一瞬明るくなり、やがて観客全員が息をのむ静けさが到来しました。この間に舞台の上では、後見人、太鼓、大鼓、小鼓、笛、そ

して謡の人たちが現れ、着座しました。いよいよ上演開始です。

今日の演目は「杜若(かきつばた)」というものです。勿論初めて聞く演目です。その内容は説明書きによると次のようなストーリーです。

「三河の国、八橋を訪れた諸国を巡る僧が、今を盛りと咲き誇る沢辺の杜若の花を眺めているところに、一人の女人が現れ、『伊勢物語』の故事を語り、とりわけこの八橋の杜若を、東に下る業平が、『唐衣(からころも)着(き)つつ馴(な)れにし妻(つま)しあれば、遥々(はるばる)きぬる旅(たび)をしぞ思ふ』と、「かきつばた」の五文字を句の上に用いて詠んだ歌を引き、僧を庵に導く。やがて、業平の透額(すきびた



椎崎神社で開催の天領佐渡両津薪能における火入れの儀。17時を過ぎて辺りが暗さを増し始めた頃、火入れの儀式が行われ、いよいよ能の上演開始となる。

い)の冠、彼が愛した二条后高子(にじょうのきさきたかこ)の衣を身にまとい現れた女人は、実は杜若の花の精であった。

歌に詠まれた唐衣とはこの衣、と明かした花の精は、業平の華麗な青春と、『伊勢物語』の東下りの様子を豊かな修辞で語り、業平こそは女人成仏の徳を備えた歌舞の菩薩であったと称(たた)え、舞い尽くして、自らも成仏の身となって東雲(しののめ)の空にきえてゆくのであった。」

という、在原業平が主人公とされる話の多い「伊勢物語」に題材をとった、ストーリーでした。まずは舞台の左方の橋懸からワキの旅の僧が現れ、今を盛りと咲く杜若の花を愛でている口上を述べます。しばらくすると今度は橋懸の奥の方からシテの女人が現れて、僧に話しかけるという場面から演能は進んでゆきました。自分が実は杜若の精であると明かした後の女人は、一度舞台の後方に下がり、衣替えをして、業

平の透額(すきびたい)の冠、彼が愛した二条后高子(にじょうのきさきたかこ)の衣を身にまとい現れて、ここから後半に入り、幾つかの僧とのやり取りの後、やがて、美しき舞いを舞いながら、橋懸の彼方に消えてゆくというシーンで終わりとなりました。

椎崎神社天領佐渡両津薪能で上演された「杜若(かきつばた)」の一場面。暗闇の中に浮かび上がる舞台は、もうそれだけで幻想的だ。

この一連の流れを90分ほど、シテとワキが厳かな雰囲気の中で、静々と語り、舞い続けます。それらの動きに合わせて鼓の音が掛け声と共に高く、低く打たれ、更に場面の節々で笛が奏でられ、それらに謡(うたい)が入るという進め方でした。勿論それらの動きの意味が判るはずもなく、音曲が入るたびにハッとしながら舞台を見上げるばかりなのですが、慣れてくると、その間合いというのか、呼吸というのか、音曲とシテの動きとの係わりの様子が何となく判るようになって来るのが不思議でした。能のストーリー展開の構成



椎崎神社天領佐渡両津薪能で上演された「杜若(かきつばた)」の一場面。暗闇の中に浮かび上がる舞台は、もうそれだけで幻想的だ。

は、後半終わりに近い場面でクライマックスを迎え、その盛り上がりの余韻を残したまま、終わりを迎えるという仕組みになっているのが判りました。このような分析的な捉え方は、能を楽しむことからは遠く離れた邪道なのかもしれませんが、もともと邪の世界に住んでいた者が初めて目にするのですから、初回は致し方ないものと自分に言い聞かせました。

理屈は措くとして、能の演ぜられている世界はまさに幽玄です。この日は快晴の夜空で、細い月を補うようにして満天に星が煌めいていました。時々音を立てて篝火が弾けて、能舞台を幻想的に浮かび上がらせています。そこで何が演ぜられているかを別にしても、この幻想的な場の持つ力は凄いなの一語に尽きません。闇の中に灯る篝火との対話は、人間と火との関係が根源的なものであることを気づかせてくれます。このような篝火を灯した中で能という芸能をつくり上げて来た先人の感覚というのは、感嘆を超えて驚きすら感じさせられます。時々夜空を見上げ、闇に浮かぶ能舞台を見上げながらの不思議を覚え続けた90分でした。

能の幽玄さは、ストーリーそのものの中にも籠められているのを知りました。というのは、この「杜若」もそうですが、能のストーリーは、この世とあの世、人間と幽界とのやりとりで構成されているのです。我々はこの世に生きている間は、この世のことしか解らないという現実があります。しかし、能のストーリーの中では、この世とあの世とを自在に行き交う人間の姿を観ることができるのです。それは、決して妄想などではなく、演じられている世界では確かな現実となっているのです。ここが能という芸術の凄さだなとも思いました。

さて、この後も3回の薪能を観ましたが、参考のために場所と演目を紹介させていただきます。

6月7日 大膳神社 「胡蝶」

6月12日 牛尾神社 「羽衣」

6月15日 草苺神社 「西王母」

これら3回の薪能も、幸いに好天に恵まれて存分に薪能らしさというか、その醸し出す独特の雰囲気存分に堪能することができました。

もう一つの上演は、ろうそく能というものです。これは舞台の設定が屋外の能舞台ではなく、お寺の本堂でろうそくを灯して行われるものでした。佐渡の古刹の一つに正法寺というのがありますが、ここは彼の申楽能の大成者世阿弥が佐渡に流された時に日々を送った場所なのです。ろうそく能は、それを偲んでの発想なのか、このお寺の本堂で上演されるものでした。

この日の演目は「井筒」という、これも「杜若」と同じように伊勢物語の在原業平に題材を得たもので、シテは国の重要無形文化財指定の松本千俊という能楽師の方でした。上演に先立ち、ここでは火入れの儀の代わりに世阿弥の供養なのか一連の仏事が行われ、最後にろうそくに火が灯されて演技が始まりました。薪能とは違った独特の雰囲気があり、最前列のろうそくのすぐ傍に坐っていると、能という芸術が目前に息づいている感じがして、迫力がありません。



その時ふと思ったのは、200人ほどの観客は皆五百羅漢の集まりで、その羅漢さんがろうそくに浮かび上がる能の舞台をじっと見つめているのではないかと。その中には、悟りからは程遠い自分もいて、迷いの中に何かを求めて演ぜられている幽界との交信を辿っている、そんな風に思えたのでした。ろうそく能は、薪能とは違って、何故か仏の世界の雰囲気となっているの

が不思議でした。

計5回の能を観て、七十路の半ば近くにもなっ

ろうそく能の上演された正法寺本堂。ここは撮影禁止だったので、この写真は上演開始前の本堂の様子を撮ったもの。このあと世阿弥供養の法要が行われ、ろうそくが灯されて「井筒」の上演が始まった

て、ようやく日本人の原点の一つを見つけたような気がしました。この世とあの世とを自在に往来しながら、究極まで圧縮された表現で思いの全てを伝えようとする、このようなアートの世界は日本人ならではのものなのだと、改めて気づかされた次第です。

これからも時々佐渡に出かけて能を見たいと思います。又、その他の場所でも機会があれば薪能などを楽しみたいと思うようになりました。この経験は、自分にとって、あの世に行く前のとても大事な出来事でした。能は、幽界との交流の中で、美しいものばかりを求めているようです。我が人生の中で、再びこの世と交流できるほどの美しい思い出があったのか？ 考えさせられます。

[2015年 佐渡一國を味わう旅から 7月13日記]

◆ 会員の趣味のコーナー

今回から第13回和光会総会の展示作品を3回に分けてご紹介いたします。

今回もこれらを始めた時期(年数)・動機、作品を制作しての喜び(感動)、苦勞したこと、「他に取り組んでいる趣味」などを含めて紹介いたします。

なお、出展出来なかった方の作品・趣味についても出来るだけ順次ご紹介をしていく予定です。

◆ 油絵(3点)

…… (2015-08) —中村弘道さんから投稿頂きました—

初冬の滝沢牧場 (F20号) '12. 12



3年前同人グループ(四季彩会)の写生旅行でハケ岳野辺山高原へ。背景のハケ岳はその夏に赤岳(百名山)の頂に立った思い出や、偶々前夜に降った雪が牧歌的な抒情を醸していたので制作意欲も俄かに湧きました。いつも心情としている臨場感と、牧場の風・匂い、山岳背景との遠近感など意識しました。

本作品は神奈川県美術家協会主催の第81回県展2014(H26-5)に出展・・・会友推薦
今年第82回県展2015(H27-4)には『雪の漁港』(F30号)を出展・・・会友賞受賞・会員推薦

① 岳沢湿原(上高地) (F20号) '13. 09



北ア・前穂高岳から岳沢を下り河童橋に至るルートに岳沢湿原が出現します。山旅の人達が疲れを癒す休憩ポイント。六百山(後方に霞沢岳)がゆったりと梓川に注がれる水面に映り込む静寂の風情に絵心が湧きました。山行途中で簡単なスケッチをしてから制作したものです。のびのび描くこと、山に沸き立つ雲・白骨樹の描写、湿原の水色の変化などに注力しました。

③ 初秋の富士御庭 (F20号) '13. 10



山の会（湘南讀山会）に入って月1回の登山を続けながら、山の風景・モチーフの出会いも楽しみです。富士御庭は御中道（大沢崩れ）歩きのルートにあるが、落葉松の紅葉と火山礫の山肌と抜けるような青空と色のコントラストが印象的でした。富士山は遠望して描くのが定番でしたが、このように山腹（=頂上は見えてません）でのスケッチポイントは意外です。制作では色のコントラスト、吹き抜ける風を意識しました。

◆ 陶芸(5点)

..... (2015-06) —金山 幸雄さんから投稿頂きました—

今回は現在通っている陶芸センターのガス窯で焼成した

①黒泥「兜」②黒泥「鶏籠型香炉」それと以前別の陶芸教室の登り窯で焼成した③備前焼「花入れ」の小物3点を紹介させていただくことにしました。

①の「兜」はもうすぐ5歳になる孫の端午の節句のプレゼントにしようかと思って遊びがてらに作ってみました。

②の「鶏籠型香炉」も備前焼作家の作品を真似して作ってみました。

ろくろを回して作品を作ると、数はたくさんできるのですが、面白味が少ないので、一つ一つの作品に細工を施して個性的な作品を作るようにしています。



黒泥 「兜」



黒泥 「鶏籠型香炉」



備前焼 「花入れ」

◆ 木彫刻 (2点)

..... (2015-06) —小藤 俊雄さんから投稿頂きました—

① 「阿弥陀如来立像」 (桧)

② 「地藏菩薩立像」 (桧)



今回は近代の、ある仏師の作品がモデルです。この人は丁寧な彫りできれいな仕上がりに定評があり誰にでも親しみやすい作品だと思います。

私の場合仏像を彫ると言っても創作することは出来ません。大雑把な姿、形は多少デッサンの心得があり仏像に関するルールを知り器用であればなんとかなりますが、誰が見ても惹かれるものが表現出来るとは限りません。ある高名な仏師は彫ろとする仏の顔、形が見えていると言いますが、私では・・・如来と言われてもどこかで見た・・・如来がうかぶだけです。

ということでこれからも気に入ったモデルを探し模刻に励みたいと思っています。

◆ 昇降機模型

…… (2015-06) —佐々木 憲一さんから投稿頂きました—
(佐々木憲一さんと河原利昭さんとの共同制作)



最終バージョンとして、MRL型昇降機模型に新しい機能を追加して2台製作しました。

「一目瞭然に昇降機の構造全容を理解できるツールとして、360度方向から視認し、昇降機の構造を理解できる「動く模型」、見る人に昇降機サービスの重要性を理解していただく！」という思いです。

全体仕様と企画は佐々木憲一氏が、稼働の詳細や制御機能設計、レールから歯車までのメカニカル部分と制御部製作など大部分は河原利昭氏が担当し、二人の共同出展です。

◆ 訃報ご報告

E-MAIL 会員各位へは INFORMATION No.133でご連絡申し上げましたが、下記の方がご逝去されました。改めてここに哀悼の意を表し、謹んでご報告申し上げます。

林 昭男氏氏 (平成27年9月27日ご逝去) (享年86)

なお、故林 昭男氏は昭和36年8月に入社され、本社総務部で乗務職として社有車の運転を担当され、昭和63年退職されるまで歴代の役員の方々の運転手として活躍されました。

◆ 事務局より

- 第13回和光会総会の展示コーナーに一昨年日本百名山を完登された中村弘道さんより「油絵」の他に、百名山登山の際の一座ごとのスケッチ記録水彩画作品「日本百名山スケッチ集」(CD)を展示して頂き、その際お願いし完登の様子を投稿して頂きました。
- 和光会会報No.34より「くるま旅くらし心得帖」の山本拓弘氏よりくるま旅について投稿いただいておりますが、今回は今年7月に行かれた佐渡の旅を投稿いただきました。
なお、山本拓弘氏の「くるま旅くらし」の最近の様子は下記ブログに載っておりますので是非ご覧ください。

<http://blog.goo.ne.jp/vacotsu8855>

「山本馬骨」で検索しても可能です。

- 会員趣味のコーナー」では第13回和光会総会の展示作品の中から、常連となりました小藤俊雄さん仏像木彫刻、昨年引き続き出展された金山幸雄さんの陶芸作品、それに3回連続展示された佐々木憲一さん・河原利昭さんの共同制作による動く昇降機模型の最新バージョンに加え、前述の日本百名山を完登された中村弘道さんの5人の方の作品をご紹介します。

・ 和光会の連絡・問い合わせ窓口について

第6期より会社（人事部）が和光会を全面的に支援して下さることになり、OB会事務作業（会員との連絡・通知、1194・カレンダーの送付等）を人事部の委託によりMTBにお手伝いいただき、MTBの担当は総務・人事支援部（部長：武田 修）で変わりありませんが、会報No.42でご連絡しましたように第13期より連絡・問い合わせ窓口は下記のとおり変更になりました。

担当：木村 律子BD、佐々木 敏行、野原 菜穂

電話：03-3803-8865（代表）

FAX：03-3803-8875

E-mail：meltec-OB-wakokai@mtb.ssg.meltec.co.jp

住所変更等通常の連絡・問い合わせはMTBの上記和光会担当か、和光会事務局（寺門）で済むと思いますが、会社の人事部の窓口は年金・基金を担当している方で次の通りです。

担当：大嶧 勝則 SK

電話：03-5810-5392（ダイヤルイン）

FAX：03-5810-5501

E-mail：oheki.katsunori@meltec.co.jp

- ・ 2015年度会費納入対象の方は2003年（創立時）、2006年、2009年および2012年に入会された方々と、会報No.41でご連絡し、対象者宛に「1194」「和光会会報」送付時振込用紙を同封いたしました。会費「4,000円（2年分）」の振り込みが未だの方は次の口座宛振り込み賜りたくよろしくお願い申し上げます。

なお、振込用紙を紛失された方は事務局あてご連絡くだされば再度送付いたします。

振込先：郵便局

口座番号：00100-7

口座記号：650896

加入者名：和光会

- ・ E-MAIL 会員各位へは INFORMATION をお送りしておりますが、最近不達が増えておりますので、**メールアドレスの変更時は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ 「和光会会報」・「1194」・カレンダーなどを会員宛送付しておりますが、宛所不在で戻ってくる場合がありますので、**転居・住所表示変更等の場合は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ パソコンのある方は、会報や総会写真を下記和光会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。
<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Kaigan/5992/>

皆様の日頃の活動やグループ活動などのお便り・投稿をよろしくお願い申し上げます。

2015-10-10 和光会事務局 寺門 三男
029-872-4122 mitsuotera@jcom.home.ne.jp